

2013年1月

●REPA 運営委員会 (2013年01月30日)

REPA 本部事務所 18:30~20:30

●第4回メタン発酵寺子屋教室 (2013年01月26日) 一面雪景色に覆われた福島県伊達市霊山町。寒さに慣れた地元の方々も、寒さが堪えると言っていた厳しい気象条件の中で、第4回寺子屋教室が1月26日(土)13:30~15:00まで山下公民館で開催されました(写真右)。地元住民18名と県外からの参加者12名を含む30人が、この日の講師である長岡技術科学大学資源エネルギー循環研究室の姫野修司准教授の話に熱心に耳を傾けました。



寺子屋教室の様子



姫野修司准教授



全体集合写真

演題は、「未利用稲わら・刈草と汚泥の一括バイオガス化技術」。姫野准教授は、稲わら利活用についての実証実験に触れ、「稲わら混合が消化特性に及ぼす影響は少なく下水汚泥と同等のメタン転換率を達成した」と述べ、安定してバイオガス生産が得られたことを報告、今後、LCA、事業性、経済性の評価を行い、水田地域をモデルケースに技術を普及したいと強調されていました。また、刈草についても、「分解性が高く前処理を必要としない可能性がある」と指摘し、「稲わら以上のメタン転換率が期待できる」との画期的な成果を披露し、バイオガス増産が可能との見解を明らかにしました。当協会が進めている実証実験においても、そのような成果が十分に期待できるとのコメントがあり、今後の実証実験にも弾みがつくメッセージをいただくことができました。地元の方々をはじめ、県外から参加された専門家の方からも、ポイントをついた質問が飛び交い、寺子屋教室は大いに盛り上がりました。

●霊山PJ 東京会議 (2013年01月25日)

REPA 本部事務所 15:30~16:30

●REPA 会員のオピニオン「アリの一穴」を掲載 篠田事務局長(2013年1月14日)

●「地球温暖化に対する取組と課題」で尾園副代表理事が講演(2013年1月10、15日)

埼玉県「彩の国いきがいの大学 川越、人間学園」の依頼により、1月10、15日 REPA 尾園副代表理事が掲題講演を行いました。内容は、①地球温暖化のメカニズム、②地球温暖化の歴史、③気候変動枠組み条約、京都メカニズム、④各国の排出量と条約国会議の推移、⑤地球温暖化対策への具体的取組、⑥地球

温暖化問題のまとめでした。

それぞれ130名、80名の参加者で、地球温暖化に対して活発な質問・意見が出て、地球温暖化の問題を再認識し、皆で考える材料を提供できました。

●今年も REPA の活動への支援・協力をよろしく(2013年1月14日)

1月14日は7年ぶりの大雪で、自宅のそば(歩いて8分)の大倉山記念館(横浜市港北区))がすばらしい雪景色となりました。



大倉山記念館裏手のオリーブ坂



大倉山記念館正面

大倉山記念館は、当初大倉邦彦氏が昭和7年(1932)に大倉精神文化研究所として開設したもので、「東西両洋における精神文化及び地域における歴史・文化に関する科学研究及び普及活動を行い、国民の知性及び道義の高揚を図ることにより、心豊かな国民生活の実現に資し、もって日本文化の振興及び**世界の文化の進展に寄与する**」ことを目的としています。精神文化に関する内外の図書を収集して附属図書館も開設され、現在も一般公開されています。

ここに、インドの詩人、思想家であるラビンドラナート・タゴール氏が(1913年(52歳)アジア人として初めてノーベル文学賞を受賞)、1929年の最後の来日の際に、大倉邦彦邸に約1ヶ月間にわたって滞在し、大倉氏に「**すべての人をひとつにしてください**」というメッセージを託しています。

前置きが長くなりましたが、冬の寒さ、アベノミックスなどで地球温暖化が置き去りにされているようですが、昨年11月26日から12月8日まで、カタール・ドーハにおいて開催された、国連気候変動枠組条約第18回締約国会議(COP18)では、相変わらず先進国、途上国の利害関係で、地球温暖化ガス削減の数値目標設定、新しい枠組み(先進国、途上国を含めた)がまとまりません。おまけに日本は京都議定書締約国の今年から始まる第二約束期間から脱退すると宣言しております。

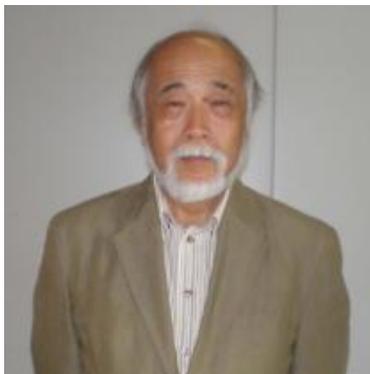
日本の地球温暖化ガス排出量は、世界のわずか4%程度です。したがって日本の環境技術、エネルギー技術でもって世界に削減の貢献して行かなければなりません。当協会も今年から海外の途上国にも目を向けて再生可能エネルギーの技術支援にも注力して行きたいと考えております。**すべての人が一つにならないと地球温暖化を防ぐことはできません**。今年も雪にも負けずに気合を入れて頑張っていきますので、ご支援、ご協力をよろしくお願い致します。

副代表理事 尾園 次郎

●佐藤茂夫代表理事の年頭のご挨拶

「畑の発電所」から始まるエネルギーデモクラシー（2013年1月1日）

新年明けましておめでとうございます。本年も皆様にとって良いお年でありますよう祈念いたします。



はじめに、当協会の活動として昨年からはまった二つのプロジェクト（水田除染プロジェクト、メタン発酵プロジェクト）が、計画通りに進捗していることを皆様にご報告いたしますとともに、それぞれのプロジェクトに関わる方々の献身的な取り組みに敬意を表します。

昨年末12月29日のテレビ番組（NHK）「エネルギーシフトへの挑戦—エイモリー・ロビンスからのメッセージ」を観ました。彼の話に依れば、日本の再生可能エネルギーの可能性は世界でもトップクラスにあり、日本企業のもづくり技術が再生可能エネルギー産業

の大きな支えになるとのことで、永年ものづくりに関わってきた者としては、非常に心強いメッセージのように感じました。さらに、番組の中でドイツのダルデスハイム（人口1000人余りの町）が電力のすべてを再生可能エネルギーで自給していることが紹介されましたが、その発端は一軒の農家が自らの手で建設した風車であったとのことでした。

目下、当協会のメタン発酵プロジェクトにおいて取り組んでいる「畑の発電所」は、まさにダルデスハイムの最初の風車に該当するのかも知れません。福島県伊達市霊山町小国村を福島県初の「再生可能エネルギー村」にするための第一歩であると思っています。ロビンスの言葉を借りれば、それは「自分たちの手でエネルギーをコントロールしていくこと」への第一歩であり、「エネルギーデモクラシー」へと続く道と確信しています。

当協会の活動が、東日本大震災復興への一助となり、さらに再生可能エネルギーの普及啓発に寄与できるよう会員の皆様と一丸になって進んでいきたいと思っております。どうぞ、本年もよろしくお願い申し上げます。